

王子軽便鉄道と支笏湖の歴史紹介

自然公園財団支笏湖支部 木下 宏

■プロジェクトの立ち上げ

明治、大正、昭和、平成そして令和の時代へ、技術がめまぐるしく進歩するなかで、今こそ改めて地域の歴史を振り返り、希薄になりつつある技術の記憶を残し、将来につなげていくことは意義深いこと。そんな思いから、一九〇八（明治四二）年～一九五一（昭和二六）年まで、王子製紙苦小牧工場と支笏湖畔、さらには千歳川沿いの王子製紙第四発電所まで延長約四〇kmを結び、支笏湖地域発展の礎となった通称王子軽便鉄道（愛称：山線）を何らかの形で再現できないだろうかと考え、地元有志により行動に移したのが今から四年前の二〇一六（平成二八）年春のことであった。そこで、まず苦小牧市内に唯一現存する三代目四号機関車を支笏湖畔に移設する方策を探るため、関係者に意見を聞くなどしながら一年ほどは足踏み状態が続いたが、諸般の事情により断念。以後、山線に関する資料が残る小樽総合博物館や苦小

牧市美術博物館を訪問し、山線再現方法に対する意見を聞くとともに資料を集めるなどして準備を進めてきた。この間、地元紙やテレビ局等に取り上げていただき気運の醸成を図ってきたところ、たまたまこの活動を知った鉄道マニアの方からのアドバイスが、その後の方向を決定付けることとなった。「現物の移設やレプリカでの再現が無理であれば、ジオラマと鉄道模型で再現してみても……それなら屋内でもできるでしょう」。私にとっては目から鱗の助言であった。それからは、道内各地の鉄道模型や資料の収集家のお宅を訪問して実際のジオラマやNゲージ、H〇ゲージの鉄道模型を見学しながら構想を練り、二〇一八（平成三〇）年七月、有志による協議の結果、ジオラマと鉄道模型と映像を加えた展示とし、自然公園財団が所有する支笏湖畔パークハウス内の展示スペースをリニューアルして整備する。資金は日本宝くじ協会の助成金を申請する。以上の

ことを決定し同年九月、日本宝くじ協会に対し、平成三一年度社会貢献広報事業助成金を申請した。また、同年一月には、山線とともに産業遺産を構成する鉄橋（通称：山線鉄橋）が土木学会の選奨土木遺産に認定され、この事業に大きな弾みをつけることとなった。山線鉄橋は北海道で現存する現役最古の鉄橋で、日本の橋梁史においても稀少かつ重要な資料として評価を受けている。輸入された一八九九（明治三二）年当初は、空知川に架けられていたが、一九二四（大正一三）年ごろに架け替えられており、その橋が山線の橋として支笏湖に移され、現在に至っている。

■事業開始からオープンまで

二〇一九（平成三二）年四月、日本宝くじ協会の助成金が採択されたことから、同年五月当支部と地元有志による「支笏湖・山線プロジェクト実行委員会」を正式に立ち上げ、いよいよ具体的作業が開始された。設計・施工業者との正式契約、月二回ペースでの打ち合わせ会議を重ねる傍ら、東京神田の古書店などを回って軽便鉄道に関する書籍を収集し基礎的知識

■ミュージアムの概要

外観は昔の駅舎をイメージし「山線湖畔驛」の看板やプラットホーム風の屋根、駅名標などを設置した。も



オープニングセレモニーの様子(2020.1.25)



山線湖畔驛外観